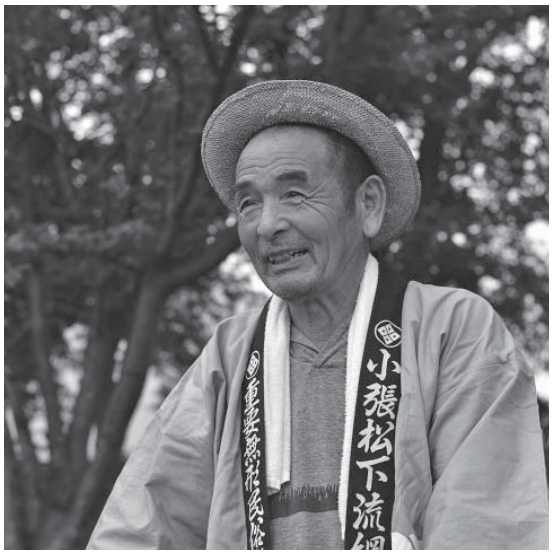
高さ、場所、タイミング。すべて合わせてこそ。



小張松下流綱火保存会・会長　山口（やまぐち） 勝弘（かつひろ）さん

手元の綱を引いたり緩めたりしながら、綱先の人形や、からくりを動かす綱火。綱の引き手が息を合わせないと、形にならないのが綱火の難しいところだ。

綱を握って50余年。現在の小張松下流綱火保存会・会長である山口勝弘さんに話を伺った。「ずっと勉強。学ぶことは多い」と山口さんは言う。「昔の先輩たちは、集まれば話題は綱火の話。自分なりのやり方を考え、みんなで意見を出し合っていた」という。

綱は、引き手のタイミングがぴたっと合えば、軽く引ける。力はいらないのだそうだ。そのためには高さ、場所、タイミング。すべてが合わないといけない。

山口さんに、小張松下流綱火の見どころを尋ねると、「最初から最後まで」と返ってきた。その言葉に、綱火への愛を感じた。山口さんはこう続ける。「桃太郎の演目で、桃太郎が鬼ケ城に入っていくところ。ここは本当に息が合わないとうまくいかない。うまくいった時は拍手をもらいたいね」と笑った。

昔は、祭礼の日には、親戚がみんな集まってきたという。集落から嫁いだ女性も、祭礼のときは帰郷した。各家庭で、ごちそうを用意して迎えたそうだ。「それが楽しみだった。祭りにくれば、旧友とも会えた」と山口さんは懐かしそうに話す。

「昔の先輩たちは、綱火を盛り上げてくれていた。だから国の重要無形民俗文化財の指定も受けられた。自分たちにできることは、綱火を、次の世代に大切に伝えていくこと」。

昔のままでやれるところは、昔のままで。

「昔のものが使えれば、できるだけそのまま使っている。昔のまま。変えちゃえば楽なんだけどね」と小張松下流綱火・家元の大橋健一さんは話す。

昔の人が見ていた綱火を、現代の人が見られるように、できる限りの努力をしているという。もちろん、金属製のワイヤーを使えば、操作の精度は上がる。切れたりする心配もない。しかし、昔からの素材を使い続ける。花火にしてもそうだ。多くの場合、火薬を固める「のり剤」を添加する。しかし、小張松下流ではそれをしない。のり剤があると火薬を早く固めることができ、作業効率も上がるそうだ。

小張松下流綱火の見どころを聞いた。「うちは、昔ながらの火薬の配合を守っている。花火本来の味わいを楽しんで欲しい」。

昔のままやれるところは昔のままに。言うのは簡単だが、実践するとなると、多大な労力を伴なうはずだ。

それでも続けていけるのは、気が遠くなるような永い年月を、ずっと守り続けてきた小張松下流綱火・家元としての信念がそうさせるのだろう。

小張松下流綱火・家元　大橋（おおはし） 健一（けんいち）さん